

第 4 講 政策評価のミクロ経済学

政策評価のミクロ経済学(1)

1) 最適化・理論化

ある政策に対してどう反応するかは仮説として理論化しておかなければならない(効果は分からないが、とにかく実証モデルに入れるというのは不可)

2) Heterogeneity の認識

モデルがある特定の個人の行動パターンを反映しているとすれば、それに必ずしも従わない行動パターンをとる人も標本(ミクロ統計)には沢山含まれる。代表的個人として捉えるのではなく、統計分布としてみる。

3) Lucas critique ルーカス批判

あるショックが与えられた場合には、個々の行動様式自体が変化するので、マクロ計量モデルのパラメータがシフトしてない。過去のデータで今後の政策反映を予測することは出来なくなる。

対応① マクロショックなどによって変化する構造パラメータ τ 変化しないディープパラメータを区別し、ディープパラメータを推計する

対応② 構造パラメータであっても Time invariant なものと Variant なものがあり、Invariantなものに限定する(モデルの特定化が大切であり、必ずしもルーカス批判が該当するケースは少ない)。

政策評価のミクロ経済学(2)

4) インセンティブ・コンパティビリティ Incentive Compatibility

ミクロ経済学に基づく経済政策論としては公共経済学における最適課税(optimal tax)の理論が重要である。この理論は 1971 年に James A. Mirrlees によって定式化されたもので、その後の公共経済、産業組織論に大きなインパクトを与えた。

基本的な考え方は経済主体が政策に応じて行動を変化させないぎりぎりのところで政策を決めるというものである。すなわちゲーム理論でいう Nash 均衡のような戦略的均衡点で政策を策定すべきだということである。

ある政策の導入によって労働供給が変化し、その結果として当初予想されていた税収が得られなければ政策としては失敗であろう。ある政策を導入しても最終的な政策目標である税収や社会的厚生が最適化が不変であるような水準に政策を決定することが重要であり、それが達成されるような政策を **incentive compatible policy** と言う。

2nd best policy

経済理論での議論はここで終わるが、計量経済学では逆に執行された政策がどの程度最適であったか、あるいはどの程度 **incentive compatible** であったかを調べる。これはルーカス批判の裏側の考え方であるが、政策論としてはこちらの方が重要。

政策評価のミクロ経済学(3)

5) ミクロ経済学を用いた政策評価では厚生関数の比較を行う

- ① パレート最適や効率性比較する
- ② dead weight loss 死重損失を推定する
- ③ 消費者余剰、生産者余剰の推定

応用

| | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 国際貿易 (関税) | 産業組織論 (税制) | 公共政策 (税制) |
|--------------|---------------|--------------|

- ④ 費用便益分析 公共投資
- ⑤ Contingent Valuation Method (CVM) 仮想評価法

政策評価の計量経済学

1) 因果性分析

Counterfactuals and Causality の哲学的、統計学的分析

2) 実験計画法の非実験データへの応用

実験計画法の完全理解

3) 離散データの利用法

離散数学、離散統計学の応用

4) 経済政策の理論

- ティンバーゲン理論と政策割当理論
- 5) ルーカス批判と誘引両立政策の理論の関係
マクロモデル批判
最適政策理論 (Optimality)
- 6) Willingness to Pay
Contingent Valuation Method (CVM)
仮想市場法
意識調査による仮想実験
- 7) パネルデータを用いた政策評価
dynamic causal effect の分析
-

参考文献

Richard E. Just, Darrell L. Hueth and Andrew Schmitz (2005) The Welfare Economics of Public Policy: A Practical Approach to Project And Policy Evaluation, Edward Elgar Pub. ISBN: 978-1845425784